

2012年7月14日(土曜日)発売のAERAに 弊社が紹介されました。

現代の肖像



パン・アキモト代表取締役なんでも係

秋元義彦

缶詰のパンに願う飢餓のない世界

阪神・淡路大震災をきっかけに開発した「パンの缶詰」が、東日本大震災でも多くの被災者を勇気づけた。非常食のイメージを覆すフワフワのパンは、飢餓に苦しむ人々、果ては宇宙にまで広がる。世界の飢餓をなくしたい。この壮大なチャレンジを支えるのは、父から学んだ不屈の精神だ。

文 石臥薫子 写真 高木忠智

かつて小麦畑だった土地は干がり、飢え死にした者が無残な姿を晒していた。去年9月、秋元義彦(59)はケニア北部の飢饉地に立っていた。「パンの缶詰」を看板商品とする株式会社「那須塩原」のパン屋の主人はこの時、NGO日本国際飢餓対策機構のハンガリー特別大使として、遊牧民の村や医療センターなどを10日間かけて回った。

ここ数年、3年保存可能というパンの缶詰の特性を生かした「救世島プロジェクト」を広めようと奔走してきた。非常食として缶詰を購入した顧客が2年後、使っていない分を返還すれば、引き換えに新しい缶詰を割引で買える。賞味期限を1年残して回収された缶詰は、NGOを通じ、無償で海外の災害地や飢饉に苦しむ人々に提供されるという仕組みだ。アフリカにも送った実績はあるが、秋元は、トウモロコシや豆を主食とする人々にパンの缶詰が本当に受け入れられているのか、自分の目で確かめるためにやって来た。

缶詰を開けパンを頬張って見ながら、人懐こい笑顔でテント暮らしの家族に勧める。母親が恐る恐る一口、三口。こわばっていた表情が和らいだ。おっかなびっくりだった子どもたちも次々とパンを伸ばす。医療センターでは、栄養を強化したビーナーストを食べようとした赤ん坊も、秋元が差し出したパンをすんなり食べた。

「支援としては小麦や豆の方が合理的かもしれませんが、でもお腹を満たすこと以上に必要なのは、生きるモチベーション。おしい食べ物、生きる希望につながると思えます」。

ある時は新聞社の通信員 オバマ大統領と朝食を囲む

那須塩原の田んぼの中に立つパン・アキモトは、正面に巨大なパンの缶詰のオブジェがあることを除けばごく普通のパン屋だ。正午過ぎ、朝の時から始めたパンならぬアイスキャンデー作りが終わり、つたばかりという秋元が、白い作業服で現れた。手作りで道の駅に出しているという。

「最近キャンデーっていうと、水に色と砂糖を混ぜただけのものばかりだけど、これは栃木産の牛乳100%。水は一滴も使ってませんよ」。

「何が入っているかわかりますか？」

「口の中ではミルクの甘みが広がるが、確かに変わった食感だ。首をひねっていると、してやったりの表情で、

「実は……かんびょう！ 栃木の特産品です！」

秋元は人を驚かさず名人だ。ある時は方パンの中から報道用の腕章が出てきた。実は「東京新聞宇都宮支局嘱託通信員」。地元事件・事故があれば駆けつけるほか、時折コラムまで書いていた。宅建資格を持ち、「不動産屋もできます」。風変わりなジーンズをはいていると思ったら「木ももの部分に穴があいたやつだったので、ほかのジーンズのお尻のポケットを切り取って自分で縫い付けました」。妻の志津子は「ずっと泳ぎ続けてないと死んでしまふ魚と一緒です。私、もう重しがなければ、宇宙まで飛んでいってしまいたい」と笑う。

一方で、敬虔なクリスチャンの顔も持つ。秋元と、那須の教会で知り合ったという元外交官でノンフィクション作家の関泰次は「教会を支える大黒柱の一人。出会い、6年前だが、その取引が圧倒された」といふ。

「最初からまるで30年先の知己のようでした。ね、顔を見ていこうかな、という気にさせられるんです。で、お店に立ち寄ると、3時間はあっといふ間に過ぎる」。

「駐米特命大使、ハンガリー大使などを兼任した間と選挙テーマは、ビジネスから政治まで幅広い」。

2012年7月14日(土曜日)発売のAERAに 弊社が紹介されました。

現代の肖像

今も毎月、社員と東日本大震災の被災者の仮設住宅を訪ね、集まった人々の目の前で「フーズアップ」や「パン」を作って配る。1日中で作ったパンを配るより、必死して作るよという気持ちで配るんじゃないかと思って]



広い。那須で次世代の人材を育てようと思っても開く。様々な業界の経営者とのネットワークも密で、頻りに上京し情報交換。オバマ米大統領が就任後初めて主催した朝食会には教会の関係を招待され、偶然隣に座った其利党の下院議員と意気投合した。幅広い人脈には、開放的な性格とは別の理由もある。

「頼られると骨身を惜しまない。そこまでする、というようになってますね。人と人を結びつけることもよくやってきたと思います。お札をと言われると「いいよ、パン買って行って」って」(志津)

秋元の人助けは自己満足の押し付けではない、と評するのは日本国際救援対策機構の常務理事、清水弘久だ。2003年のイラン大地震の際、秋元がコンタクトしたのがきっかけで親しくなった。「救援物資を送りたいという問い合わせはよく来るんですが、輸送費は？と聞くのと大抵「えっ、うちが払うの？」と驚かされる。ゴミになるものをうまく処分してくれたらラッキーくらいのお気持ちなんですね。そこで、秋元さんは最初から輸送費も自分のところで持つ、という強い意思があった

たつて、田舎では発想も生活水準も全く違ふ。でも若者から、いろいろやりたいんですよ。結局、地やした店舗のうち3店舗くらいはうまくいかに閉めましたけど」

父への尊敬と反発に揺れ動きながら、パン屋として着実に歩み始めた秋元は、95年、大きな転機が訪れる。阪神・淡路大震災である。神戸の教会には父の知り合いがたくさんいた。すぐトラックに2千個のパンを積んで現地へ運んだが、輸送に時間がかかったこともあり、6割が廃棄されてしまった。無力感に落ち込んでいた頃、被災者から連絡が入った。

「乾パンのように日持ちがして、バターロールや菓子パンのように柔らかいものを作りたい」

「真空パックや冷凍保存などを試したが、味や食感が損なわれてしまう。化学の専門知識や設備もない中で無理かとあきらめかけた時、近くの農産物加工所で偽造作りを目にした。そうだ、その

本当にありがたかった」

防腐剤なしで3年保存可能 中国や米国でも特許取得

行動のベースにあるのは、クリスチャンとしての信仰心。だが、人を助けることの真の意味を、身をもって教えたのは父の徳だった。父は、顔から手にかけての広い範囲が、赤黒く変色し、ひきつれていた。戦中、大日本航空のうちの日本航空で無線通信士として働いていた時、乗っていた航空機が墜落。炎上。自分は奇跡的に無傷だったものの、炎の中を乗客の救助に向かい、全身大やけどを負ったのだ。激痛と度重なる皮膚移植の苦みに自殺まで考えたというが、信仰を支えに耐え、戦後もなく、人々の空腹を少しも満たさずと、後遺症の残る不自由な体を克服し、それから6年後、父は多岐を請うらず、その苦難は母を相手から聞かされた。

「悪いことをしたらさうすにげんこつが飛んでくるんですが、やけどのせいで手の肉がなくて骨に直接皮膚が貼られてるんですから、その痛さというたが格別でした」

秋元が幼い頃、時折、閉店際の店を訪ねてくる高校生がいた。

「すみません、パンの耳は余っていませんか」

やがて、その字は秋元家から通字するようになる。秋元家とて4人の子どもを抱え余裕はな

手があった！ すぐとばしたが、焼きたてパンは柔らかすぎて歯に入れない、もたつく嫌悪が入る。ならば缶にパン生地を入れ、そのまま焼けば救済もできるはず。妙手と思えたが、結局どやけたパンが缶の内側にべっぴんとくっついてしまった。ペーキングシートを敷いてもうまくいかない。そこで思い浮かんだのは、湿気を調節してくれる障子だった。調湿と耐熱性を兼ね備えた紙を求め、製紙メーカーに片っ端からあたり、ようやく海外製の紙にたどり着いた。

「まさに、ああ難題ならぬねした」

震災から1年後、防腐剤、添加物なしで3年保存可能なという世界初のパンの缶詰が誕生した。製造から時間が経っても、缶をあけた瞬間、イチゴやオレンジの甘い香りが漂い、パンはしっとりフワフワ。製法の特許は日本、中国、米国、台湾で取得した。これは世界のどこでも役に立つはず。大空を駆けつけてゆけ。そんな思いを込め、秋元は会社名を「秋元ペーパー」から「パン・アキモ」に変えた。Pan Paperを開発したのだという。

NASAで採用され宇宙へ 賞味期限でゴミにさせない

そして、世界どこかいきなり宇宙を目指すところから、いかにいかに。ツテを頼って宇宙開発事業団を訪ね、短期の宇宙滞在を終えた若田光一がミッション報告を聞き、その話を聞いた。NASAの整備士出身の若田とは、秋元の父が元無線通信士という縁もあり親しくなった。01年には米ヒューストンのNASA（航空宇宙局）まで缶詰を持参。採用の返事ももらえなかったが、日本人宇宙飛行士が長期滞在する時がくればチャ

つたが、学生の家庭の困窮を知った父が、無償援助を申し出たのだ。秋元は突然、年のお兄ちゃんが出てきたと驚く。金魚のフンのようについて回った。学生は東京の大学を卒業後、新聞記者となり、後に秋元の仲間になる。今、嘱託通信員をしているのもその縁からだ。

秋元父子を知る人がアメリカにいる。1952年に宣教師として来日、東京・東伏見でクリスチヤン学生のための寮を設立し、法政会時代の秋元の面影も見たチャールズ・コウインだ。

「ヨシヒコとお父さんは、寮に入りたというところで一緒に来ました。お父さんは、あれほど働いけがから立ち直り、ゼロからパン屋を立ち上げた。すごい人でした。ヨシヒコはパンの缶詰を作ったり、救済を広げるのになくさんの壁を乗り越え、あのお父さんから受け継いだものだと思います」

秋元が海外に目を向けるきっかけをつくったのは、このコウインだ。学生を連れ、インドやパングラデッシュ、ネパールなどを回り、伝道や学生寮の設立を手伝った。豊かな日本へ一歩出れば路上で死にゆく人々がいる。その現実が、若い心に突き刺さった。もっと世界を見たい、夢見た職業はパイロットか新聞記者。しかし、祖母から懇々と説教された。「あなたに夢がある。育ててくれたお父さんを裏切ってはならない。育て、家業を継いで」。

「父とは毎日のようにぶつかり、取っ組み合い寸前までいきました。父は「片目」東京を見るのはいが両目で見ちゃダメ。同じことをやろうとし

NSはあ、と信じ、缶のふちだけががましい工夫をする。改良を重ねた。こうしてNASAの厳しい検査をパスしたパンの缶詰は、09年3月ついに若田と共に宇宙へと旅立った。

「空から見れば、国を隔てる赤い線や青い線がないのと同じように、私は、ここから先は行けない、と自分で制限しました。前例がないこと、チャレンジしていると言われるけど、誰だかって、明日という前例のないところに向かっています。毎日生きているじゃないですか」

テロルの声で爽やかに言い放つ秋元だが、パンの缶詰は、宇宙はともかく地では、ほとんど売れなかった。引き合いがあったのは一部の自治体のみだが、04年の新潟県中越地震の発生直後、状況は一変した。現地に持ち込んだパンの缶詰を被災者が喜んで食べている様子が報道され、注文が殺到したのだ。生産が間に合わず、沖繩に3億円かけて工場を建設した。那須の小さなパン屋にとつては大躍進。だがこの頃、ある矛盾に悩まようになってくる。

「納入先の自治体から、賞味期限が来たら処分して欲しいと言われたんです。私たちはゴミを作っているから悲しくなりました。私はパン職人ですから、心を込めて作ったものを捨てられるのはやばいイヤなんです。でも本来、災害が起きないことは喜ばしいことだし……」

そんな時、スマートフォンが振動する。現地から「食料が足りない。賞味期限が近づいてる。いいのでパンの缶詰を送って」と連絡が入った。その瞬間、子盾の解決策。のち救済局プロジェクトのペーパーとつながるアイデアが浮かんだ。缶詰がゴミにならずに、必要とされる災害地や飢饉に苦しむ地域に届けばいい。脳裏には学生時代、コウインと見た途上国の光景が蘇っていた。

2012年7月14日(土曜日)発売のAERAに 弊社が紹介されました。

現代の肖像



救世島は通常のパンの缶詰の箱の大きさで、メンバー2人を置くことができる。パンを食べた後、缶が食器として扱われることもあるため、ふちでけがをしない工夫も

■あさもと・よしひこ

1953年 栃木県那須郡那須町(現・那須塩原市)で、秋元パン店を営む健二・信子夫妻の長男として誕生。小学校に上がる頃からパンの箱詰めなどを手伝う。4年生で自転車を買ってもらって大活躍した。それは軽運のためだと賞われ得意とした。高校ともクリスマスで、中学2年で卒業。高校時代は5種競技の栃木県チャンピオン。

72年 法政大学経営学部入学。クリスチャン学生寮に入り、地上国を回る。寮金活動で志津子と知り合い、フオークバンドを組む。

76年 大学卒業。東京のパン屋で修業。初日から「降りたい」と実家に泣きを入れる。

78年 秋元ベーカリー入社。志津子と結婚。その後、2男2女に恵まれる。

92年 阪神・淡路大震災。被災地に送ったパンが一部廃棄される。被災者の涙を思い、餅作りに思いを寄せ餅つきパンの発売に着手。

96年 パンの缶詰を開発。当初は毎年9月1日の防災の日にしか売れる。

98年 中国で特許取得。空死丸。

2000年 日本・米国・台湾で特許取得。社名をパン・アキエに。

01年 NASAにパンの缶詰を持参。

04年 イラン大規模の被災地にパンの缶詰を送る。新潟県中越地震の被災地で活躍。

05年 インドネシア・スマトラ島沖地震の被災地などに缶詰を送る。受注急増で生産工場増設。

07年 安藤百福賞受賞。パンの缶詰10万缶をシンパズに。

09年 パンの缶詰を改良したSpace Breadがスペースシャトル・ディスカバリー号に搭載され宇宙へ。宇宙飛行士が船内で食べる様子がテレビで紹介される。

10年 ハイチ地震。被災地に3万缶を輸送・配布。「救世島プロジェクト」始動。NDRU(救世島)駐日英国大使館など約100の企業・団体が参加。

11年 3月、東日本大震災。直後に在庫1万5千缶を無償提供。救世島の参画団体や個人にも提供を呼びかける。計画停電や経費削減に苦しみながら被災地支援に奮闘する様子などを伝へて取り上げられ、多くの賞賛が寄せられる。これまでに累計約20万缶を支援。9月、災害に備えるため、水・毛布などを備蓄・管理・配送するためのNPO法人「災害支援機構 We Can」を設立。

12年 企業フィランソロピー大賞特別賞受賞。救世島プロジェクト普及のため米国ロサンゼルスに現地法人設立。

「お腹がすいていからおいしいのは当然だけど、ただか私たちがパン、しかも旨味制限が少ないパンで、あれだけ喜んでくれるとは思わなかった。職人冥利につきました」

「現場で、自分の目で見ることを常に心がけている。1年後に起きた東日本大震災でも、社員を連れ、支援が届きにくい孤立集落を一軒一軒回った。「食べてみてみてほしい」。秋元の温かみのある声と、フワフワのパンに、張り詰めた心が破れたのか、口に含んだ瞬間、別を震わせ喉を潤す人もいた。しかし、こうしたことは一時の善意だけでは続けられない。

「日本では商売を前面に出すと嫌われますが、利益をきちんと出し、ビジネスとして成立して、そ息の長い社会貢献ができる。本業を大切にしながら利益の3〜5%を義援に充てる。この考えに賛

同する人が参加できるシステムを作るのが、私の使命だと思っています」

救世島プロジェクトのアメリカ進出計画も動き出した。同国はリケイテンなど自然災害も多く、何よりキリスト教の国で、ボランティアへの理解・関心が深い。備蓄という保険機能と国際貢献を併せ持つ救世島を受け入れる素地は十分にあると見込んだ。ロサンゼルスに現地法人を設立。現地のパン屋とライセンス契約を交わし、缶詰の製造を委託する計画だ。世界で軌跡を刻む人は10億人。1分間に17人が飢えて命を落としている現実からすれば、パンの缶詰は、砂漠に2滴の水を落とすようなものかもしれない。しかし、この仕組みが広がれば、他の食品でもやろうという人が出てくるかもしれない、と力をおぼめる。

「命を懸けて人を救った父には到底かないませんが、千里の道も一歩からです」

父譲りの不屈の魂がひびくことはない。

石臥薫子
福岡県生まれ。新聞記者。最初作家生活を志す。フリーのライター、ディレクター。本業では脚本家・演出家や「アートディレクター」業務もこなす。フワフワプロジェクトの推進などを執筆。

(文中敬称略)